

六群比丘と十七群比丘

仏教教団の究極の目的は、和にある。そして、原始仏教教団は、その典型と考えられているが、しかも、その中にあって、破和合僧（Saṅghabhedā）の大逆事件をおこし、新教団の独立まで計画した提婆達多には、多くの伴党があり、助調達比丘尼、十二衆比丘尼と呼ばれた、仲間もいた。この外、經典、論部、殊に律典に、夥しくでくる惡比丘の伴党の代表が、六群比丘と十七群比丘である。そして、この二群は、前者が^①上座で、年長であり、後者が下座で、年少であつたが、両者は、常に争つていて、教団内のトラブルが、たえなかつたと言われている。

六群比丘（Cabbagiyā bhikkhū）は、また、六衆苾芻と訳されている。彼等は、長く、提婆に事え、助調達比丘尼と、屢々、会合して、ふざけ、十二衆比丘尼と親しくし、コーサムビー（Kosambhī）比丘と深い関係があり、その首領ともなつた。不如法の比丘は、多く、彼等に近づいた。

六群の比丘の罪惡は、枚挙に遑がない。彼等は、惡邪見の

春日礼智

除罪を主張し、大力でありながら、なまけ者であつた。薩婆多毘尼毘婆沙卷四には、それらの六人の名を挙げている。難途は難陀（Nanda）で、跋難陀は優波難陀（Upānanda）である。迦留陀夷（Aludiyā）の性格は、多く不明朗であるが、ここでは、優陀夷（Uṭṭariyā）即ち、鄢陀夷として出てくる。闍那（Channa）は、多く、闍陀と写されている。これに、馬宿、満宿を加えて、六人である。六人中、難陀、優波難陀は多く、対句をなし、最も凶惡で、老いて、承事する者もなく、或は捨置羯磨をうけ、またはうけんとした。^②六群の上座は、難陀である。今、この六人を分類すると、難陀、優波難陀は多欲、優陀夷、闍陀は多癡、馬宿、満宿は多瞋という。また曰く、三人多欲―難陀、優波難陀、優陀夷。二人多瞋―馬宿、満宿。一人多癡―闍陀、これなりと。その他、この六人について、いろいろの異説がある。

六群比丘については、彼等は、身は比丘でありながら、比丘らしからぬことを、たくさんした。即ち、彼等は、極め

て、おめかしで、瓔珞を身につけ、髪を梳り、頂髻をつけ、金、銀、瑠璃、水精、玉石の指環をはめ、五種の刻印上に、男女の非法の像を刻し、新衣を染めぬいで着て、仏陀に叱られた。また、^⑪十二衆比丘尼に近づき、周利般特の悪口を言い、比丘尼と同行、同船し、^⑫十二衆比丘尼と、宮人の浴池に入り、王舎城の三温泉の中、王の入る温泉に入つて、いつまでも出て来ないで、王を困らせたこともあつた。彼等はまた、^⑬十七群比丘と、池の中で泳ぎ、ふざけて、十七群比丘の衣を、叢にかくして、叱られた。六群比丘は、皆、音楽が好きで、音楽をよくし、中でも、難陀、優波難陀は有名である。そこで、彼等は、^⑭十二衆比丘尼のため、伎楽人に、歌舞を作らせたり、鼓樂を鳴らして、毘舍離の人々を驚かせ、王舎城では、耆梨竜祭での、伎兒の所得の等分を強要して、暴力団振りを發揮した。その他、彼等は、再三、戦争を觀にゆき、軍中に宿し、その批評をして叱られたり、土を掘り、又、人に掘らせたり、堤防をつくつて、蟻の巢をこわしたり、火遊びをしたり、淨園中の菜地で、立小便や、涕唾をしたり、美食家で、食事中の行儀悪く、^⑮同一の床に臥し、^⑯人の肩や背、脚を、拳で叩いたり、甃石を投げたり、頭上に、物をのせ、腰間に、物をはさんで、叱られたり、外道と喧嘩し、悪行者を度する等、数え切れない、悪行を働いている。

次に、六群比丘の、僧伽内での不行跡について、述べてみ

六群比丘と十七群比丘（春日）

たい。まず、彼等は、比丘でありながら、種々の外道の呪を誦した。また、^⑰コーサムピー比丘の罵詈謗の仕方を學んで、大衆中で、高声大喚、衆僧を乱した。彼等は、争いを好み、常に、他の比丘を罵り、會つて、王舎城にあり。口汚なく、他の比丘の悪口を並べて叫喚したので、仏陀が、これを制止したが、聞かず、呵責された。また、そのため、比丘僧が二分した。會つて、^⑱諸比丘が、余分の三衣を、大迦華に与えたというので、文句を言つたこともあつた。そして、彼等は、屢々、犯罪を犯し、改悔せず、反つて、長老を誣謗するのであつた。彼等は不平家で、施主をそしり、^⑲界外から来ながら、施物の分配について、文句を言つたり、僧衣の分配の時、わざと姿をかくして、後から出てきて、不平を言つた。同じようなことは、^⑳舍衛城の安居の時にもあつた。即ち、六群比丘は、他の比丘が、安居の用意をしているのを見て、見ぬふりをし、あとで、臥具を要求して、叱られた。その外、^㉑摩訶男（Mahānāma）に、ない藥を求めて、恥をかかせ、滅損沙弥と同居して、その少欲知足、頭陀を行ずるを見て、喜ばなかつたり、^㉒弟子の取り合いをして、制裁された。

次に、六群比丘の人物を、個別に見て、見たい。六群比丘は、薩婆多毘尼毘婆沙卷四、鼻那耶卷九等に依れば、何れも豪姓で、或は、優陀夷の婆羅門出身を除き、他の五人は、釈迦族であつたとも、いわれている。その中、難陀は上座であ

つたが、⁽⁴³⁾ 仏弟難陀と區別され、⁽⁴⁴⁾ 優波難陀の兄とされ、二人は音楽が好きで、⁽⁴⁵⁾ 老いて、なお、身体をゆすつて、歩いていた。また、二人は、⁽⁴⁶⁾ 頂髻を作らしめ、鏡を見るといふ、おめかし振りであつた。難陀は、⁽⁴⁷⁾ 法務に明るいことで知られている。次に、⁽⁴⁸⁾ 優波難陀は、難陀と共に、最も毒害をなした人だが、二人中、この方が、更に苦切で、⁽⁴⁹⁾ 老いて、十七群比丘から、⁽⁵⁰⁾ 捨置羯磨の仕返しを受けた。彼は、もと、馬術、兵法に長じ、出家後も、⁽⁵¹⁾ マガダ国は、大臣、将帥五百人を遣わして、從學せしめたとか、⁽⁵²⁾ 軍將を度した話が、伝わっている。また、彼は、⁽⁵³⁾ コーサムビーの Udena 王の親友で、王に乞われて、コーサムビーで安居した。しかし、彼にも、いろいろ、悪評が残つていて、⁽⁵⁴⁾ 女に抱きついた話、⁽⁵⁵⁾ 一商人の子と争い、官に訴えて、⁽⁵⁶⁾ 彼を打つた右手を切らせて、悪名を天下に流した話、⁽⁵⁷⁾ 説法の名人で、⁽⁵⁸⁾ 偷羅難陀比丘尼の弟子に説法して、その衣を奪つた話、⁽⁵⁹⁾ 仏陀の入滅を聞いて「我、自由をえたり」と、叫んだ話が伝わっている。彼が死んだ時、衣鉢、価三十万両金あつたという。

優陀夷は、また鄢陀夷と写し、迦留陀夷と區別し難く、有部律卷四十三には、

我諸弟子声聞衆中、教化有情、令得聖果者、鄢陀夷、為第一。

と書いてあるが、なかなかの問題のあつた人である。彼は、⁽⁶⁰⁾ 在俗時、淨飯王の大臣として、⁽⁶¹⁾ コーサラ一國に使し、⁽⁶²⁾ 波斯匿

王大臣密護の妻、笈多の美貌を見て、これと通じ、密護の死後、これを妻としたので、⁽⁶³⁾ 迦維羅衛と舍衛城に二つの邸宅を持つていた。それで、彼は、出家後も、⁽⁶⁴⁾ 笈多のところへ行つて説法し、⁽⁶⁵⁾ 旧妻善生比丘尼の誘惑を受けて、男女和合像を作つて与えたり、⁽⁶⁶⁾ 男女交合の像を刺繡し、他人の交情を妨げたり、⁽⁶⁷⁾ 女人を房舎に引き入れて、悪名、天下に流布した。しかし、彼は、結局、⁽⁶⁸⁾ 舍利弗の教誡に依つて、⁽⁶⁹⁾ 阿羅漢果を証し、⁽⁷⁰⁾ 勝鬘夫人の師となつたが、⁽⁷¹⁾ 惜しいことに、⁽⁷²⁾ 賊帥に殺された。

闍陀については、⁽⁷³⁾ 摩訶僧祇律卷二十四に、⁽⁷⁴⁾ 釈迦族の奴隸から出家した尊者闍陀があり、⁽⁷⁵⁾ 有部破僧事卷三には、⁽⁷⁶⁾ カピラ城の一大臣、⁽⁷⁷⁾ 闍陀の名が出てゐるが、これが六群比丘の一人となつた闍陀か、どうか、わからない。六群比丘の闍陀は、⁽⁷⁸⁾ コーサムビーの Udena 王の信賴を得、⁽⁷⁹⁾ コーサムビー比丘の首領となつた人で、⁽⁸⁰⁾ 惡邪見を以て知られ、⁽⁸¹⁾ 有虫水 (asapadaaka-Etakka) を用い、⁽⁸²⁾ 三十万錢の大房舎を作つたが、⁽⁸³⁾ 即日成り、⁽⁸⁴⁾ 即日倒れたということである。この人は、⁽⁸⁵⁾ 仏陀が、その入滅前に「わが死後、若し、彼が、威儀に順わず、教誡を用いなかつたら、⁽⁸⁶⁾ 梵檀罰 (Grahmadanda) を加えよ」と、言つた人で、⁽⁸⁷⁾ 迦葉は、⁽⁸⁸⁾ 阿難に、これを命じたが、⁽⁸⁹⁾ 阿難は、⁽⁹⁰⁾ 反つて、これを教化した。

⁽⁹¹⁾ 馬宿、⁽⁹²⁾ 満宿は、六群中、早く死んで、⁽⁹³⁾ 詳しいことは、わからない。

次は、十七群比丘⁽⁸¹⁾ (Sattarasāvaggiya bhikkhū) である。此はまた、十七衆苾芻とも書き、十七群童子とも、いわれている。彼等は皆、王舎城内の年少、富貴の子で、大は十七歳、少は十二歳の、柔軟な衆人で、大目乾連の度である。その上富者は八十億万錢、下貧者も、八十万錢を持っていた。その首領を優波離 (Upali 鄔波離) 又は、小優波離と、言つた。彼等は年少なので、時々、おなかをすかせて泣き、夜中、一人で、便所や手洗いにゆくことができず、闇中、師の影を見て、鬼とまちがえて、泣いた。彼等は Aciravati 河にて水浴し、あばれ廻つているところを、末利夫人に見つけられて、叱られた。

黙るに、この十七群比丘は、自ら、六群比丘に狎習しながら、両者は、常に争いが絶えなかつた。そこで、六群比丘は、自らの豪姓を待み、十七群比丘の年少であることをあなどり、十七群比丘と先を争い、十七群比丘中、少欲知足、頭陀を行ずる者のあるのを見ては、瞋り、年少にして、具足戒を受けたことを誹り、掌を挙げて、十七群比丘に立ち向い、頭をなぐり、十七群比丘の衣鉢、坐具、針筒等をかくし、初夜、こわい声を出して、ふるえ上らせ、いつも、十七群比丘を啼かせていた。そして、その最大たる者は、優陀夷であつた。

この六群比丘に同調したのが十二衆比丘尼である。その頭

首は Thullananda 比丘尼である。彼女は、阿難の旧妻でありながら、提婆達多、その他の悪人と交わり、大迦葉に逆らい、欲心熾盛で、言語に絶する醜聞の数々を残している。十二衆比丘尼は、彼女を頭とした、難陀、優波難陀、珠髻難陀、底沙底沙、密多羅底沙、波離多底沙、絡綺多、跋陀羅、蘇跋陀羅、孫陀羅、逝延多で、彼等は、舍衛城の枳多山に住し、門徒が、極めて多かつた。彼等は、六群比丘と、極めて親しく、歌舞、伎樂を好み、食時の時の行儀が悪く、肩をゆすぶつて歩き、Aciravati 河で、水浴して、ふざけ、比丘尼として恥かしい、不淨行をした。

十二衆比丘尼の非法に対し、十二法比丘があつた。彼等は、六群比丘の非法や、六群比丘と、十七群比丘の争を、仏陀に申し上げ、その匡正に尽した。

仏、祇洹精舎にあり。この時、優陀夷は既に阿羅漢果を証し、闍陀はコーサムビーにゆき、馬宿、満宿は命終していた。ただ、難陀、優波難陀は、老いて、逝多林に住んでいた。今や、十七群の比丘は漸く長大、勇健、有力となり、三蔵の教を善くした。そこで、彼等は協議して曰く「我等は、長い間、いつも、六群比丘のため、欺軽せられた。六群中、難陀、優波難陀は、常に毒害をなし、優波難陀は、更に苦切であつた。我等、宜しく、捨置羯磨をなすべし」と。そして、先ず、優波難陀に、捨置羯磨を加えた。すると、彼は、

六群比丘と十七群比丘(春日)

老いて、承事する者がなくなつた。そこで、彼は、泣きながら、難陀の所へ行つて、助けを求めた。難陀も、仕方なく、十七群比丘のところへゆき、優波難陀の赦しを乞うた。十七群比丘曰く「汝も、同罪である」と。ここに至つて、難陀も亦、泣いた。善見律毘婆沙卷十一に言う、十七群比丘が一老六群比丘の鉢盂を取り、これを地に倒し、その上に乗つて、これを殺したというのは、優波難陀のことかも知れない。

- 1 毘尼母經卷四。 2 十誦律卷四八、鼻那耶卷七、同卷九。
- 3 僧祇律卷七。 4 十誦律卷四二、同卷四四。 5 有部尼律卷一五、同卷一六。 6 鼻那耶卷七、同卷一〇、四分律卷四七、毘尼母經卷四。 7 十誦律卷三九。 8 同上卷一四。
- 9 同上卷一一、有部律卷三五。 10 十誦律卷一六。 11 馬宿・滿宿は、有部律卷三九、同卷四一、同卷四二、有部尼律卷一五には、阿説迦、補捺伐素と写す。有部百一羯磨卷八は、前者を阿濕薄迦と書いてゐる。 12 有部律卷三九、同卷四一、有部尼律卷一四。 13 大乘菩薩正法經卷二五には、六群の比丘名を善見、妙利、作喜、賢吉、名刹、利牙と写してゐる。 14 有部律卷三六。仏本行集經卷五六は、ただ朋党とす。十誦律卷一七。
- 15 有部雜事卷一、同卷三、同卷四。 16 鼻那耶卷九。 17 有部尼律卷一六。 18 鼻那耶卷七。 19 有部尼律卷一五。 20 有部律卷四〇、同卷四一、有部尼律卷一五、鼻那耶卷九。
- 21 有部雜事卷四。 22 同上卷三二。 23 有部律卷四〇。 24 十誦律卷一五。 25 十誦律卷一五、有部尼律卷一四、波斯匿王

- の兵を觀る。有部律卷三六、觀兵。僧祇律卷一八、十誦律卷一五、軍中に宿す。 26 有部律卷四一、有部尼律卷一六、鼻那耶卷九。 27 有部律卷三八。 28 鼻那耶卷一〇。 29 有部雜事卷一、鼻那耶卷八。 30 有部雜事卷五、一鉢で食す。又、ただ、一椀で食す。鼻那耶卷七。 31 有部雜事卷六。 32 同上卷一。 33 十誦律卷三九。 34 有部律卷三五。 35 同上卷三八。 36 四分律卷五三。 37 鼻那耶卷一〇。 38 同上卷七。 39 十誦律卷九。 40 五分律卷九。 41 同卷一九。 42 有部律卷二〇。 43 十誦律卷三九。 44 同上卷一一。 45 五分律卷八。 46 十誦律卷一五。 47 同上卷三九。 48 薩婆多毘尼毘婆沙卷四。 49 僧祇律卷一四。 50 有部雜事卷一、同卷四。 51 同上卷七。 52 同上卷三。 53 有部律卷三八。 54 有部律卷三九、同卷四一、有部尼律卷一四。 55 有部律卷四一、同卷四二、有部尼律卷一五、同卷一六。 56 薩婆多毘尼毘婆沙卷五。 57 十誦律卷三九。 58 四分律卷三七、同卷五一。 59 有部律卷三八。 60 十誦律卷三九。 61 同上卷四三。 62 五分律卷三〇。十誦律卷六〇は、一愚癡不善の老比丘とす。 63 十誦律卷六一。 64 有部律卷一七、有部尼律卷一八。 65 有部律卷一六。 66 僧祇律卷一五。 67 有部律卷三七。 68 五分律卷七。 69 五分律卷二。 70 有部律卷三九、同卷四一、同卷四二。 71 同卷四五。 72 同卷四三。 73 毘尼母經卷四。 74 四分律卷四七。有部律卷三八、同卷三九、同卷四一、參照。 75 鼻那耶卷九。 76 有部律卷三七。 77 長阿含經卷四・遊行經。 78 五分律卷三〇。 79 有部律卷三九、同卷四一、有部尼律卷一四。 80 僧祇律卷

- 一八は、十六衆苾芻とす。 81 僧祇律卷一八。 82 五分律卷八、僧祇律卷一八、十誦律卷一六。 83 十誦律卷一六。 84 毘尼母經卷七。 85 十誦律卷一六、有部律卷八、同卷三六、同卷三七、同卷三八、同卷四〇、同卷四一、有部尼律卷一四、有部出家事卷三、五分律卷八は畢陵伽跋蹉度とす。 86 有部律卷八、同卷三六、同卷四〇、有部尼律卷一五、有部出家事卷三。 87 五分律卷八、十誦律卷一六。 88 五分律卷八。 89 五分律卷八、十誦律卷一六。 90 有部律卷三七、同卷四〇、同卷四一、有部尼律卷一五。 91 十誦律卷四八、鼻耶耶卷七。 92 有部律卷四一。 93 十誦律卷三九。 94 同上卷一五、同卷一六。 95 同上卷一六。 96 同上卷一四。 97 僧祇律卷一八、十誦律卷一四。 98 五分律卷九、十誦律卷一六、有部律卷四一。 99 有部尼律卷一五。 100 有部律卷三七、同卷三八、同卷四〇、同卷四一。 101 有部尼律卷一五、同卷一六。 102 有部雜事卷三二。 103 有部尼律卷七。 104 同上卷一八。 105 同上卷一六、同卷一八、有部雜事卷三二。 106 有部雜事卷三二。 107 有部尼律卷一三、同卷一四、同卷二〇。 108 同上卷二〇。 109 同上。 110 同上卷一九、同卷二〇等。 111 鼻耶卷八、同卷九、同卷一〇。 112 同上卷七。 113 有部律卷三九、同卷四一、同卷四二、有部尼律卷一四、同卷一五、同卷一六。

新刊紹介

中村 元著「原始仏教の思想」下

第五篇 思想体系化への歩み

第六篇・付論 原始仏教聖典成立史研究の基準について

増補 現存聖典検討のための新研究

B 6判 本文四九〇頁

春秋社刊 定価 三〇〇〇円

R・A・スタン著
山口瑞鳳・定方晟訳 「チベットの文化」

第一章 土地と住民

第二章 歴史の概観

第三章 社会

第四章 宗教と習俗

第五章 美術と文学

A 5判 本文三四六頁

岩波書店刊 定価 一五〇〇円